碩　心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認　可
神奈川　碩　心　会　発　行

61年12月号（173号）
発行者
根岸岳萃
編集者
中村愛岳

61年12月現在会員数

逗子地区	176名
葉山地区	285名
大船地区	62名
（合計）	（523名）

もう一歩の努力で初心を忘れぬ

吟甫　大山　政山

何ごとも慣れると慢性になり、最初の強い決意や覚悟がうすれてしまう。詩吟も最初に練習した頃のことを思い出し、真剣味や情熱が薄れたのではないかと思うことがしばしばある。

少し上手に吟ぜられるようになると、始めた頃の火のつくような熱心な練習は？自分としては毎日努力しているつもりではいるが、今一歩の練習がたりない様である。昔から「百尺竿頭さらに一歩を進む」といっているが、もう一歩の努力がたりないのではないか。

天才とか、成功している人はいつももう一歩ふみきっている。一応の基礎が出来、吟ぜられるようになるとそれに満足する。この時こそもう一歩の練習が必要である。

その点我が吟甫はよい師に恵まれ、又先輩の暖い援助で練習が出来て非常に倖せである。

いま流れている川の水はもとには戻らない。夜中でも流れ続けている。今日の水は昨日の水ではない。永遠にもとの川には戻らない。私達の今日の練習は明日への上達に繋るのだ。明日からと言わず、今日から再び初心にかえって大いに練習しようではありませんか。

正師範認許（61・9・1日付）

小峯桜岳先生が右認許されました。おめでとうございます。

。

62年度　碩心会初吟会

と　き・62年1月18日(日)10時より
ところ・京急ビーチセンター
会　費・三千円
申込〆切・61年12月20日(各支部毎まとめて)

62年度　県本部初吟・初理事会

と　き・62年1月25日(日)
ところ・平塚農業会館

自然と人生

（冬至）

今日は冬至なり。霜枯の草を踏みて野外に立てば、一望寒景、蕭條（しょうじょう）として、枯蘆（ろ）風に戦ぐ音、葉もなき川揚（かわやなぎ）に囀（さえず）づる鶺鴒（せきれい）、水涸し野川の音、皆年の行く行く暮れなむとするを語る。

十二月廿二日

第42回　県本部吟道大会終る

右大会が11月9日(日)綾瀬文化会館に於て行われ、左記の方々が参加されました。遠方、そして雨の中御苦労様でございました。

合　吟　海南行　佐久間爽風外
〃　富士山　綱川哲風外
〃　神　州　鈴木萃岳外
独　吟　偶　感　秋元粱岳
〃　廬山瀑布を望む　森田嶺岳
合　吟　神　州　磯村朋子外
コンクール　偶成(四位入賞)　重松ゆき外
〃　詩　舞　日本　愛す　吟　竹石憲岳
〃　千葉劒岳
舞　千葉香岳
〃　綾部秋岳
〃　村田瀞岳
〃　西村昌風
〃　安田寿風
スライド吟詠　偶　成　松井正風
〃　涼州詞　立沢御風
合　吟　九月十三夜　千葉香岳外
〃　神　州　小峰桜岳外

(時間の関係で県本部役員は合吟)
(常任理事)　加藤岳相
(副本部長)　根岸岳萃

市民とふれあいの文化祭

清田嬬風

すばらしい晴天に恵まれた十一月二日に第36回逗子市文化祭詩吟詩舞の会が図書館ホールで開催されました。

各流派連盟の会ですので、吟じ方も流派によって大分違いがあります。岳風流系は「起承」「転結」を二句三息を原則として吟じられておりますが、流派によっては起句を二息で吟じ、承句も二息という吟じ方もある様ですが、二句三息を聞きなれているせいか、時間的にも二分、又は二分以上になっているケースが多い様でした。

全体的に皆様大変のびのびと吟じられていられまして、嬉々として参加されている様子で、四・五年前の文化祭とは雰囲気が違って参りました。

秋は文化祭、春には詩吟詩舞連盟主催の発表会があります。年二回の会で、流派は違っても同じ市民、顔なじみもふえたせいでしょう。午前中は満席で立見の方も多く午後少し空席が出来た位の盛況でした。

秋天に響く老若男女の吟声

更に内容の充実をめざして

菊薫る十一月三日、第20回葉山町文化祭詩吟詩舞の会が葉山小学校体育館に於て行われました。

暖房のない会場故、天候が何よりも気がかりでしたが今年も午後からはうす陽もさしはじめホッと胸をなでおろしました。

葉山の場合、もっと他流の方に参加してほしい。又この辺で更に内容充実を皆さんの創意協力により実現出来たらと思います。

役員の方々の早朝よりの任務遂行、参加者全員の協力で無事盛会に終了しました。

吟の楽しみ方みつけた

秋の散策

堀内(D)　森本・石黒

おだやかな秋日和に恵まれた十一月十四日、D組吟友仲間は心うきうきと葉山の秋を見つけに出かけました。日頃はせわしなく通り過ぎる山々も、すっかり紅葉し、野路の足もとには色とりどりの小菊が咲き乱れて秋の深さを感じさせてくれました。

坂を登りきると腰懸山実教寺に着く。新しく建立された久遠堂（納経堂）と、年輪を重ねた本堂との対象的なたゝずまいに感動する。

寺をあとにパークド四季葉山に出る。パッと開けて整地された団地には、近代の粋を集めた個性的な家々が建ち並び、現実の

世界に戻る。勝手気まゝに批評したり、感心したり、時に気に入った家をバックに記念撮影などして楽しむ。

路地に咲くつわぶきの鮮やかな色に見とれつゝ坂を登りつめたところで、やおらボケットから教本が出る。紅葉した山に向い思い切り声を出し合吟する。我々の声があたりの美しい山々に吸いこまれてゆく様でなんともいえない満足感を味う。

山を下り新善光寺に着く。白モクレン、白椿等町の天然記念物、又切妻銅葺の四脚門は県の重要文化物、其の他数々の文化財がある。お詣りをすませ、寺前で又一吟し寺をあとにすれば門前の大銀杏が秋の陽に映えて絵の如く、落葉をふみしめながら石段を下ると、落葉拾いに興じた子供の頃の事が懐しく思い出された。そして近くのレストランでひと息、又の機会を約束。

久しぶりに歩いた満足感と、あらためて地元葉山の秋の美しさをかみしめ、そしてこんなにすばらしい吟の楽しみ方を発見し、吟のお仲間入りをさせていただいてよかったと心から思い、足どりも軽く帰途につきました。

小春日のもみじうるわし新善光寺（森本）

紅葉の山にこだます吟の声

心なきかすみて聞ゆる　（石黒）

李　白（盛唐　七〇一―七六二）

唐は他のいずれの時代よりも詩が盛んであったが、雲と群がる詩人の中で、李白と杜甫が最高峰である。この二人は中国最大の詩人であるのみならず、世界のいずれの詩人と比較しても、優るとも劣るものではない。この二人が同時代に生きていて相互に交りのあった事も知られるところである。杜甫と李白を比べると、杜甫の方が分別があり、李白に意見でもしそうで、先輩らしく思われるが、杜甫は李白より十一才年下である。

李白一斗詩百篇
長安市上酒家に眠る
天子呼び来れど船に上らず
自ら称す臣は是れ酒中の仙と

杜甫は「飲中八仙歌」の酒豪八詩人の中で、李白を右のように言っている。

李白は毎日酒に酔っぱらっていた。彼はアルコール中毒詩人である。世界に酒飲み詩人と放浪詩人は数多いが、李白の如く泥酔して自由奔放、孫悟空の如く幻想の雲に乗って、天地を馳け回って行くようなスケールの雄大な詩人は少ない。

日高く睡り足りて猶起くるに慵し…之は白居易の詩であるが、同じ廬山の香炉峰を詠んでも李白とは全く違う。常識家白居易に比し、李白は実に豪放にして破天荒。李白の次の詩の何と勇ましく、豪快なることか。李白は古今独歩である。

廬山瀑布を望む　李白

日は香炉を照らして紫煙を生ず
遥かに看る瀑布の長川に挂くるを
飛流直下三千尺
疑うらくは是れ銀河の九天より
落つるかと

ぎんなん

山行の「車を停めて坐ろに愛す楓林の晩」を吟ずる時、自動車を思い浮べても別におかしくない詩句である。それにしても、一体どんな車であろうか。唐詩選画本によれば、ゆったりとあぐらをかいた広さの箱（高さは坐高）の下に、直径約一米ぐらいの二輪。前に一米ぐらいのかじ棒二本である。桜美林大学の石川忠久教授の詩の説明では、山行の場合は、小高いところを手押車でゆっくり登る程度とのこと。従って、押手は客（車）の後であるはず。別に右と同形の車を、かなりの荷を積んで二人の男が引いている図もある。

練吟メモ

○人名地名等の固有名詞は、放送関係の者は特に神経をつかっているようである。氏名の読みのむつかしさは言うまでもないが、地名もまたながい年代を経ているので、吟詠にあたっては十分注意しなくてはならない。ごく身近に「追浜」があるが、これを字のとおり「おいはま」と呼んだら、ずっこけてどうにも締まらない。われわれ吟詠に際しては、人名や地名には十分留意し、正しい読みで吟ずるよう心がけたいものである。大げさでなく、吟者個人の名誉にかかわることゝなるから、指導者はとくに注意が必要である。

○新教本の中の日本漢詩には、地名はあまり出て来ないが、二、三気のついたことを取り上げてみたい。二巻の「近江八景」の冒頭に「堅田」が見えているが、これを「かただ」と濁って吟ずる人がかなりある。これは「かたた」と澄んで読むのが本当。「かたた」では発声しにくいとか、吟調を乱すとかいうことを理由としているようであるが、それは自分の音痴を証明しているもの。固有名詞「かたた」は、それ以外の呼び方はないのであるから「かたた」と正しく澄んで吟じよう。

○最近は大部分の方が正しく吟じており結構であるが、旧教本三・24にある「舟中子規を聞く」の「八幡山崎」は、「やはたやまざき」ではなく「やわた、やまざき」である。これは教本の中の（読方）が「やはたやまざき」と振り仮名がしてあったことに起因するようである。ともかく、京都と大阪の境界で淀川をはさみ、八幡町は男山の西ふもと、山崎は天王山の東ふもとの地名で、むかしはともに京阪を結ぶ交通の要衝であったので間違えようがない。

○同じく旧教本三・17の「河内路上」は、ほとんどの方が「かわち」と正しい読み方をしているが、まだ一部「こうち」としているところがあるようだ。これは、明治になってから「かわち」に統一されたものでそれまでは（こうち）（かうち）（かふち）などであったらしい。もともと淀川の内の意（かわうち）から出た語であるが、この地方を守護していた楠正成の時代には、別称を（河州）とも言った。この詩の作者菊池溪琴は、幕末から明治十四年にかけての漢詩人であるから、あるいは、作者自身は「こうち」と読んだかも知れないが、現在漢詩関係の本はすべて「かわち」であって「こうち」と読むことはまったくない。

（入　会）

773 浅野雅明　横須賀市長沢一七七六－一二
（逗子A）（電）〇四六八－四九－五六六五

774 梶山茂男　横須賀市長沢一七七六－一二
（逗子A）（電）〇四六八－四九－五六六五

775 草柳武夫　横須賀市坂本町一－四八
（逗子A）（電）〇四六八－二二－六五六二

776 坂本美佐子　横須賀市ハイランド四－一－一〇
（逗子A）（電）〇四六八－四九－六五七一

777 清野正一　横須賀市岩戸五－九－二
（逗子A）（電）〇四六八－四九－五二六三

778 秋本　毅　横須賀市長井三－五－一七
（逗子A）（電）〇四六八－五六－二三五四

（退　会）

621 加藤由泉（堀内・G）
739 栗原恒夫（逗子B）

693 鈴木吉枝（堀内・G）
742 吉原　晃（逗子B）

野山をいろどる紅葉もそろそろ散りはじめ、枯色が広がってきました。木枯らしが吹くたびに、初雪前線が南下して、季節は足早に冬へと動いています。年内にこの月報をお手許にと思い早々に編集しました。各支部毎の納吟の様子その他は新年号に掲載したいと思いますので、どしどし原稿をお寄せ下さい。風邪などひかぬ様どうぞよいお年をお迎え下さいますよう。